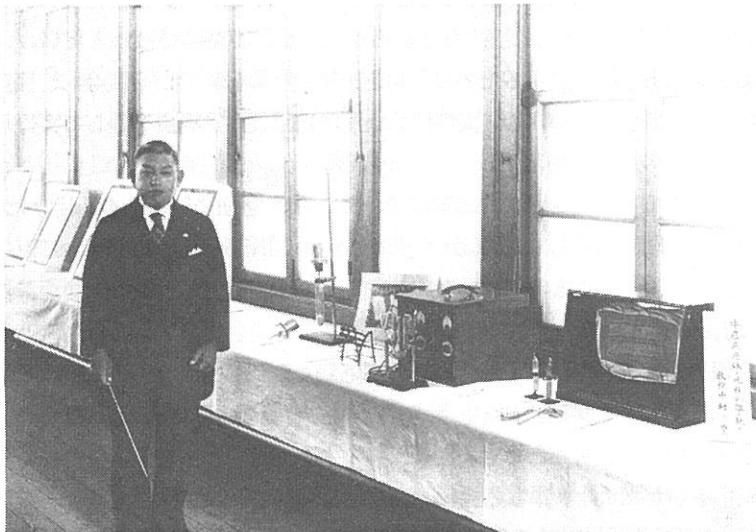


北海道支部会報

日本細菌学会北海道支部



写真撮影の時期は不明であるが、中村 豊 先生（北大医学部細菌学講座初代教授、北海道立衛生研究所初代所長）が情熱を燃やされていた随伴物質の研究に用いられたカタホレーゼの前で（昭和5年～10年？）

一目 次

卷頭言	皆川 知紀	2
寄稿「支部学術総会の当番校として」	平棟 孝志	3
寄稿「内なる病原体」	平藤 井暢	4
研究「最近1年間の論文から」	藤田 晃三	5
研究「ライム病シンポジウム」	佐藤 七七郎	6
支部活動		
学術集会		8
評議員会・幹事会		8
平成4年度会計報告		9
支部役員名簿		10
賛助会員名簿		11
会則		12
編集後記		13

〔巻頭言〕

支部長 皆川 知紀

支部活性化の見通しが付くまで支部長をもう一期やってほしいとの声に、つい男氣を出してしまい引き受けてしまったが、支部活性化は果して進んできたであろうか？初心忘れるべからず、今、流行の自己点検評価をやってみる。多分に勝手なところがあるが、御寛容いただきたい。

- 1) 支部学術集会を魅力あるものにするために北海道医学大会の分科会から脱会し、独自に抄録集を作った。本部学会の抄録は小さいため、支部抄録は丁寧に集談会、総会を通して実行してきた。それだけ印刷費、郵送費の出費が増えた。
- 2) 学術集会、支部例会では、シンポジウム形式で広く、深く勉強になる会を心掛けた。昨年秋には、小沢理事長の支部会訪問に際して、「Host – parasite relationship」のテーマで寄生虫からスクリイピーまで勉強した。1月の総会では「ライム病」について臨床と基礎の両面からの活発な討論の場を持ち得た。
- 3) 北海道支部会報を発刊できた。第1号の表紙に相応しく BAK No. 1 の Leitz の顕微鏡の写真で飾った。佐藤儀平先生の「ザンビアの衛生事情」、中根先生の「ライデンカンファレンスに出席して」の海外ニュースに加えて、研究として、脇坂仁美先生の「齧触原生細菌についての最近の研究」のユニークな玉稿をいただいた。単なる会報とはひと味異なる北海道支部会報であった。残念なことに歴代支部長の記録が無いことが判明した。学会事務センターに記録があるかも知れないでの次号には掲載できればと考えている。
- 4) 研究と同じく支部活動も活発になる程に、支出は大きくなる。会員の年会費を500円から、1,000円に増額させていただき、さらに贊助会員を支部長の手の届く範囲でお願いした。19社から38万円の会費をいただいた。心からお礼申し上げる。それらの収入は大方1)、2)、3) プラス講師謝礼などに消えてしまった。今後ともよろしくお願ひしたい。
- 5) 6月18日には、「細菌学は今」というテーマで天児九大教授、竹田京大教授、浜田阪大教授、篠田岡大教授による支部会主催講演会を行う。そのPRのためにポスターを作ろうと考えている。支部会員は勿論、会員外の人たちにも来ていただければと考えている。11月には平棟教授が会長となって支部学術集会が酪農学園大学で行われる。学術総会が支部長の手を離れるのは初めてのことであろう。ミルクとイモ、トウモロコシの懇親会が今から楽しみである。
- 6) あとは会員の増加と研究の成果を祈るだけである。そのためには研究の質の向上と1つでも多くの研究の拠点となる研究室、研究施設の確保を会員全員が努力することが要求される。この点が、点検評価の項目では最も重視されるべきであることを強く自戒し、私の支部長としての点検を終えたい。

[寄 稿]

支部学術総会の当番校として

酪農学園大学獣医伝染病学教室 平 棟 孝 志

日本細菌学会北海道支部会の活性化が皆川支部長を中心に強力に押し進められていますが、その一環として総会を持ち回りで開くことが昨年、承認され、まず酪農学園大学でとのことで当番を引き受けました。詳しい日程、内容などは支部会事務局と相談して決め、改めてご案内しますが、例年通り11月を予定しています。本来ならば今秋の総会の抱負など述べるべきでしょうが、未だ具体的に計画されていませんので、ここでは本学園の紹介をさせていただきます。

函館本線または国道12号線で札幌から岩見沢方面に向かうと大麻駅を過ぎて間もなく右手の丘の牧草地の中に校舎が並んでいるのを目に入れます。これが学校法人酪農学園で、今年創立60周年を迎えます。すなわち、1933年に創立者黒沢西蔵氏らが苗穂町に社団法人北海道酪農義塾を設立し、酪農民およびその指導者教育を始めました。1942年に現在地に敷地を求め、野幌機農学校が開設され、後の機農高校になりました。機農高校の呼称は「機を知るは農の始まりなり」の黒沢西蔵先生の信念に由来する呼称であり、トラクターなど農機具の「機」ではないと知ったのは本学に来てからでした。1958年に女子高校が設置され、1960年に三愛高校と改称されました。現在、両校は統合され、「とわの森三愛高校」と呼ばれています。

1950年に酪農学園短期大学酪農科が発足し、1985年に教養学科増設に伴い、酪農学園短期大学の名称を北海道文理科短期大学と改め、さらに1990年に経営情報学科が増設されました。一方、酪農学園大学は、1960年に酪農学部酪農学科新設に始まり、1963年に農業経済学科、1964年に獣医学科、さらに1988年に食品科学科が増設されました。1984年に獣医師法改正に伴い、獣医学科の修業年限が4年から6年に改められました。

大学院として1975年に獣医学研究科修士課程が、1981年に同研究科博士課程および酪農学研究科修士課程、さらに1991年に酪農学研究科食生産利用科学専攻博士課程が設置されました。

この他、付属施設として農場、乳製品・肉製品実習室、家畜病院、図書館、エクステンションセンターなどがあります。同センターでは、国際交流の推進、各種公開講座の開催および酪農専門の月刊誌「酪農ジャーナル」の刊行、販売を行っています。

上述した高校、短期大学、大学、大学院の学生・生徒さらに教職員数を合わせると約5,000名になります。ここ江別市文京台の学園敷地面積は142ヘクタールで、裏手は野幌原始林に接していますので、来客は「広大な敷地があってよいですね」といわれますが、ほとんどが農場の牧草地として利用されています。

大学、短大学生の出身地は学科により多少異なりますが、総じて関東、近畿、中部、北海道地区が多数を占め、この他、沖縄を初め全国各県から隈無く集まっています。これも本邦唯一の酪農を専門とする大学の特色かも知れません。

ところで、酪農学園ではキリスト教に基づいた教育が行われ、「神、人、土を愛する三愛」精神、「健土健民」思想さらに「実学」主義を建学の精神としてかかげ、実践しています。入学式、卒業式々次第が莊厳なオルガンの響きと賛美歌で進められること、あるいは宗教主任による聖書拝読と祈り始ま

る教授会など、本学教員としてこれらに初めて接した際の新鮮な驚きと感動を忘れ得ません。なお、黒沢講堂の二階に創立者黒沢酉蔵氏の思想と実践を知る記念品が展示されていますので、総会終了後にでもご案内します。

以上、まるで学生募集のための入学案内のような文になり恐縮です。このところ、支部会の集まりは金曜日が多いようですが、使用教室、駐車場などの関係上、総会開催は土曜日以外は難しいかと考えています。週休2日の現在、ご迷惑をおかけしますが、ご来学の機会が少ない意味で、近くて遠い酪農学園大学での総会に会員皆様が大勢お越し下さいますようお待ちしています。

[寄稿]

内なる病原体

札幌医科大学微生物学講座 藤井暢弘

私達の周囲には多くの感染性病原体が存在し、そのいずれもが医学的に重要な位置を占めている。札幌医科大学医学部微生物学講座では、これまで歴代の教授の指導の基に、これらの病原体のうち“細菌”と“ウイルス”に関して数多くの研究業績をあげてきた。初代の植竹教授、二代目林教授、三代目小熊教授諸先生方の業績には心から感嘆するのみであります。私のような浅学菲才の者が“今後の抱負”などと仰々しく何かを論ずるには恐れ多くて口をつぐむばかりであります。しかし、微生物学の将来的課題については、興味が湧いてきます。

今後、病原体の変遷や研究技術の改良、進歩が我々のような講座にどのような課題を提起するでありますか？感染性病原体を前にした時、迅速、正確に検出、診断し、病原体を宿主から排除するのが医療の主目的であろうと思われます。しかし、病原体の概念も、この数年間に大きく変貌をとげる時期に来ている感がします。このことは、同時に新たな感染防御、予防、治療方法を考える必要性にせまられることを意味しているはずであります。

本来、我々の遺伝子の中に潜む“内なる悪魔（—あるいは進化の天使—）”、動く遺伝子—トランスポゾン、レトロポゾン—、あるいは内在性レトロウイルス（ERV）などの遺伝子が示す病原性、病態形成への役割がより明かになってくるであります。現時点において、ヒトにおける内在性レトロウイルスは約16種以上を数え、多くの自己免疫疾患への関与が明確になりつつあります。さらにnon-LTR型レトロポゾンのLINE型であるL1ファミリーが、乳ガン、直腸ガン、血友病、Duchenne型筋ジストロフィー症の原因となる場合のあること、また同じnon-LTR型レトロポゾンのSINE型、Aluファミリーが、Von Recklinghausen病、無コリンエステラーゼ血症、Adenosine deaminase(ADA)欠損症、の原因となることも証明されています。これらの多くは宿主細胞の構造遺伝子への挿入の結果であります。

遺伝子から遺伝子へ転位（感染）するこれらの分子病原体をいかにして不活化するか？（しかし、これらの遺伝子は個体の進化にとって必須のものであったとすれば、不活化の意味する問題はさらに大きくなるであろう）

個体間における非感染性病原体から感染性病原体への進化をいかにしてくい止めるか？

現在の我々は、感染性レトロウイルスさえ有効に押え込む手だての無い状況にあります。この先の戦いはどうなることでありましょうや？

[研 究]

最近1年間の論文から

旭川医科大学小児科学講座 藤 田 晃 三

私は小児細菌感染症に関連した臨床細菌学的研究を行っております。この1年間に掲載されました論文から、細菌学に関連した論文の要旨を紹介致します。御批判、ご意見戴ければ幸いです。

1. Kozo Fujita, Koichi Murono, Hiroshi Sakata, Masato Kaeriyama : Methicillin-resistant *Staphylococcus aureus* empyema in children. *Acta Paediatrica Japonica* 1992 ; 34 (2) : 151 – 156.

14年間に20例のメチシリン耐性黄色ブドウ球菌による小児膿胸患者を経験した。12例は市中感染で、8例は院内感染によると考えられた。患者はペニシリナーゼ耐性ペニシリン、セファロスポリン、あるいは、カルバペネム抗生物質の単独、あるいは、他剤との併用で治療された。また、胸腔ドレナージ、あるいは、反復胸腔穿刺が施行されたが、7例が死亡し、そのうち6例は敗血症を合併した。敗血症を合併した1乳児例はバンコマイシン点滴静注とドレナージで治療され治癒した。メチシリン耐性黄色ブドウ球菌の流行が認められる状況下でのブドウ球菌膿胸患者には、感受性が判明するまでバンコマイシン静注で治療を開始する必要がある。

2. 藤田 晃三、室野 晃一、吉河 道人、坂田 宏、丸山 静男、西條 政幸、滝本 昌俊、高橋 庸二、印鑰 史衛、楠 祐一、村井 貞子、稲積 温子、岸下 雅通、山崎 伸二、竹田 美文：非化膿性合併症、重症感染症患者から分離されたA群の溶連菌の性状。感染症学雑誌 1992 ; 66 (11) : 1497 – 1501.

Kozo Fujita, Teiko Murai, Masamichi Kishishita, Shinji Yamasaki, Yoshifumi Takeda : Characteristics of group A streptococci isolated from children with nonsuppurative complications or severe infection in Japan. *Pediatr Infect Dis J* 1992 ; 11 (11) : 981 – 982. (letter)

1977 – 1991年に散発の非化膿性合併症、重症感染症患者29例から分離されたA群溶連菌29株の血清型別と発熱性外毒素型を調べた。疾病はリウマチ熱、関節炎、中枢神経合併症、急性糸球体腎炎、アナフィラクトイド紫斑病、敗血症、膿胸で、菌は血液と胸水以外は咽頭スワブから分離された。分離菌のM血清型は、多い順に1、4、3、12、18型などであった。すべての株に発熱性外毒素産生遺伝

子が検出され、その型は、AあるいはAと他の型が24%、B単独が31%、BとCが45%であった。M血清型と毒素型との関連では、1、18型株はAまたはそれとほかの型の毒素、1、4、12型株はBまたはそれとC型毒素を産生した。アナフィラクトイド紫斑病患者からの分離菌11株中7株はM1、2株はM4型で、M12型は認めず、毒素BあるいはB・C型産生遺伝子が検出された。

3. 角谷不二雄、藤田 晃三、伊藤 真也、室野 晃一、石岡 透、西條 政幸：生後1カ月児の糞便および血清中ビタミンK濃度と腸内菌叢；母乳栄養と人工栄養の比較、日本小児科学会雑誌 1993 ; 97 (1) : 7 - 12.

生後1カ月の母乳栄養児12例と人工栄養児9例を対象に糞便と血清中のビタミンK1 (VK1) とメナキノン (MK) の定量、糞便中菌数の菌種あるいは菌群レベルでの測定を行い栄養法別に比較した。糞便中ではVK1とMK5-9濃度が有意に人工栄養児に高かった。人工栄養児の糞便中MK4-10総濃度は6,310ng/gで、母乳栄養児の約3倍あった。糞便中菌数では人工栄養児に連鎖球菌と大腸菌が多く検出された。糞便中連鎖球菌数とMK7、MK8濃度、大腸菌数とMK8濃度の間に有意の正相関があった。血清中VK1濃度は人工栄養児で有意に高かったが、血清中MKは母乳栄養児で9例中5例、人工栄養児で8例中1例に検出されたのみであり、その濃度には栄養法による差をみいだせなかった。

4. Koichi Murono, Kozo Fujita, Michito Yoshikawa, Masayuki Saijo, Fumie Inyaku, Hitoshi Kakehashi, Teizo Tsukamoto : Aquisition of nonmaternal Enterobacteriaceae by infants delivered in hospitals. Journal Pediatrics 1993 ; 122 (1) : 120 - 125.

病院で出生する新生児が腸管に獲得する大腸菌の由来が、母親由来であるか、あるいは、環境由来であるかを知るために、新生児糞便から分離される大腸菌と母親の糞便から分離される菌をプラスミドプロファイルで比較した。三つの異なる病院で9、10、10の29ペアについて調べた。29ペアのうち25ペアでは大腸菌あるいは他の腸内グラム陰性桿菌のプロファイルは母児で一致せず、従来の報告とは異なり母から児への伝播は一般的ではないと考えられた。一つの病院では10例中8例が同一のプロファイルの大腸菌を保有し、院内感染が強く示唆された。もう一つの病院でも9例中7例が同一のプロファイルの大腸菌を保有し、この菌は病原因子の一つであるK1抗原陽性であり、そのプロファイルは同じ病院で出生し尿路感染症に罹患した2乳児の起炎大腸菌とも一致した。この結果から、病院によっては新生児は院内感染の形で病院特有の大腸菌を腸管内に獲得し、臨床的に重要なことと考えられる。

[研 究]

「ライム病」シンポジウム

北海道立衛生研究所 佐 藤 七七朗

平成5年1月29日、座長平棟孝志先生の御司会により、私を含む5人の演者が各自の演題（後述）で

ライム病について報告を行いました。そしてこの機会に北海道のライム病の研究者が初めて一堂に会しました。また、北海道はライム病の流行地として国内で最も色濃い状況下にあります。従って北海道独自ででもライム病に対処して行かなければならない事情にもなっています。そういうことで、本シンポジウムの意義が十分に理解されるのではと思います。御企画された北海道支部長と関係された諸先生に改めて感謝致します。

シンポジウムの内容はライム病の全般的な課題（佐藤）、病原体の媒介者（宮本）、野生動物の役割（磯貝）、犬の臨床例（東）、人の臨床例（橋本）となりました。佐藤は演題“ライム病の現実”で病原体が genotype と phenotype に類別され始めてきていることに加えて、二の北海道株が *Borrelia garinii* と VS520 それぞれの genotype group に分類されたこと；北海道の患者に遊走性紅斑以外の神経症状や運動機能障害が認められ、毎年患者が発生していること；現在多用されている血清診断法（蛍光抗体法、酵素抗体法、ウエスタンプロット法）の不十分性；治療投薬としての抗生素の現状と開発の必要性；シーズンを通してマダニのボレリア保有率はどう推移したのか；感染予防に関するマダニの吸血時間の意味などについて述べました。このようにライム病は検討の余地を多々残している疾患でもあります。宮本は“ライム病の媒介者と病原体保有動物”の中で、マダニ類と保菌動物の間で実際に起きているボレリアの伝播様式について述べ、マダニの経期感染や吸血によるボレリアの移行を明らかにしました。欧米のマダニ単種による伝播に対し、日本のライム病は2種（シュルツェマダニとヤマトマダニ）による伝播が考えられています。しかし患者発生との関連で見ると、マダニが保有するボレリアにもう一つの未知の部分が隠されているようです。一方、マダニのボレリア保有率と保菌動物の関係もマダニの各発育ステージが絡んで一様でないものがあります。動物との係わりは磯貝の演題“野生動物とライム病”に結びつきます。ここでは自然界におけるライム病ボレリアの維持機構をマダニのボレリアと動物の血清疫学から考察を加えています。キタキツネは犬との近縁性から臨床的に興味ある対象でもあります。野生動物はマダニの生息に欠くことのできない要因で、特に北海道では年々高まるエゾシカの繁殖圧がマダニ誘導への懸念を與えています。次ぎの演題“犬とライム病”で東は犬の症例を国内で初めて経験したと報告しました。北米ではすでに人のライム病と重複して犬の罹患が認められていますが、国内ではライム病の患者発生にもかかわらず犬については未報告でした。しかもこれらの症例は欧米でも疑われながら位置づけされていない神経障害症例であることから、この報告は国外で注目を浴びるものとおもわれます。今後シーズンの到来と共に犬のライム病症例が積みかさねられ、より確かなものとなって行くことが期待されます。橋本は“ライム病の臨床”の演題で、国内で最も豊富な病原体分離症例を紹介しました。この中で典型的な皮膚紅斑からもボレリアの分離培養に成功している例、また5割余に及ぶ分離成功率が注目され、従来欧米で低率（約10%）とされてきた皮膚からの生検培養が、見直されるような結果となっています。そして演者は遊走性紅斑以外の皮膚疾患関連症へのアプローチを求めています。

シンポジウムの中で、ライム病に関し北海道と本州との比較はあまり言及されませんでしたが、患者の発生頻度、シュルツェマダニの生息密度などから、ライム病は北海道の風土病的性格を持っているといつても差し支えないと思います。北海道で実際毎年どの位の患者が発生しているのか把握する手法、システム、施設機関が無いのでそれを知ることはできませんが、この地域に生息するマダニのボレリア保有率から推測すれば、アメリカの北東部の状況に匹敵するのではと考えられます。しかし、住民とマダニとの接点を考慮すると、両者の住宅環境の違いによりマダニと出会う頻度はアメリカが

日常的であるのに対し、北海道は特例的（例えば山菜取り、登山、ハイキング）であること、識別の困難な若虫の吸血が日本では殆どないなどの理由で、より少なくなっていると推察されます。いずれにしても北海道では患者が現実に発生しているので、適正な治療と感染予防の認識が必要とされます。

[支 部 活 動]

平成4年度日本細菌学会北海道支部学術集会

平成4年2月12日 第130回集談会（ムトウ講堂）

「トキソプラズマの感染防御」

座 長 白幡敏一先生

演 者 鈴木康弘先生

追加発言 白幡敏一先生

平成4年11月20日 第60回支部学術総会（北大百年記念会館）

特別講演

「感染症研究をめぐって—その足跡と展望」

座 長 皆川知紀先生

演 者 小澤敦先生

シンポジウム

「Host – Parasite Interaction」

座 長 皆川知紀先生

演 者 神谷正男先生

古屋宏二先生

藤田晃三先生

杉山俊郎先生

横沢紀子先生

中根明夫先生

澤田幸治先生

品川森一先生

平成4年度評議員会・幹事会

平成4年8月26日 幹事会（北大・医・細菌学教室）

議 題 :

- 1) 支部学術総会におけるシンポジウムについて
- 2) その他

平成4年10月7日 幹事会（北大・医・細菌学教室）

議 題 :

- 1) 支部学術総会のプログラム編成

[日本細菌学会北海道支部平成5年度役員名簿]

支 部 長 皆 川 知 紀 (北大・医・細菌)
 庶 務 中 根 明 夫 (北大・医・細菌)
 会 計 浅 野 美佐子 (北大・医・細菌)

評 議 員	相 川 孝 史 (道立衛生研究所)	東 匠 伸 (旭川医大・細菌)
	磯 貝 浩 (札幌医大・動物実験)	井 上 勝 弘 (東京農業大・生化)
	江 口 正 志 (家畜衛生試験場)	絵 面 良 男 (北大・水産・微生物)
	小 野 悅 郎 (北大・獣医・衛生)	木 村 喬 久 (北大)
	熊 谷 満 (北海道栄養短大)	熊 本 悅 明 (札幌医大・泌尿器)
	小 林 邦 彦 (北大・医・臨床検査)	斎 藤 玲 (北大・医療短大)
	佐 藤 儀 平 (北海道RIセンター)	品 川 森 一 (帶畜大・獣・公衆衛生)
	清 水 亀平次 (帯広畜産大)	白 幡 敏 一 (帶畜大・獣・微生物)
	砂 川 紘 之 (道立衛生研究所)	富 澤 功 (市立札幌病院)
	中 島 良 德 (北海道薬科大・微生物)	波 岡 茂 郎 (北大)
	馬 場 久 衛 (東日本大・歯・細菌)	平 棟 孝 志 (酪農大・獣医・伝染病)
	藤 井 暢 弘 (札幌医大・微生物)	前 川 静 枝 (札幌医大・微生物)
	宮 川 栄 一 (酪農大・酪農・微生物)	森 洋 樹 (東日本大・薬・微生物)
	梁 川 良 (酪農大・獣医・伝染病)	吉 岡 一 (北海道療育園)
	吉 田 哲 憲 (北大・医・形成外科)	渡 辺 繼 男 (北大・歯・細菌)

幹 事	磯 貝 恵美子 (東日本大・歯・衛生)
	鎌 口 有 秀 (東日本大・歯・細菌)
	木 村 卓 郎 (北大・免研・血清)
	小 林 弘 幸 (北海道薬科大・微生物)
	西 森 敬 (家畜衛生試験場)
	横 沢 紀 子 (札幌医大・微生物)

会計幹事 松 宮 英 視 (天使短大)

首 藤 文 栄 (北大・獣医・生化)
菊 池 裕 子 (北大・歯・細菌)
小華和 杓 志 (北大・医・細菌)
武 士 甲 一 (道立衛生研究所)
藤 田 晃 三 (旭川医大・小児)

橋 本 信 夫 (北大・獣医・公衆衛生)

[日本細菌学会北海道支部会則]

I 総 則

1. 本会は日本細菌学会北海道支部という。
2. 本会は北海道在住の細菌学関係研究者によって組織される団体である。
3. 本会は細菌学領域の進歩を促進することを目的とする。
4. 本会の目的を達成するために次のような事業を行なう。
 - イ. 集会（総会・集談会等）の開催
 - ロ. 日本細菌学会本部との連絡
 - ハ. 国内の関係諸機関諸学会との連絡
- 二. その他必要と認められる事業

II 会 員

5. 本会の趣旨に賛成する人は会員となることができる。
6. 会員は会費を納めなければならない。
7. 会員はその業績を集会において発表することができる。
8. 会員は評議員1名以上の賛成を得た上で本会の運営に関する議案を評議員会に提出することができる。
9. 本会の趣旨に賛同し、本会の活動を援助するため、毎年一定の賛助会費を納めた団体あるいは個人を賛助会員とする。

III 役員及び役員会

10. 本会に次の役員をおく。

支部長	1 名	評議員	若干名	庶務係	1 名
会計係	1 名	幹 事	若干名	会計監事	2 名
11. 次期支部長は現評議員の互選に基づきこれを定め総会において了承を得る。
12. 新評議員は会員の中から、支部長がこれを委嘱する。
13. 会計監事、幹事、庶務係及び会計係は会員の中から支部長がこれを委嘱する。
14. 支部長、幹事、庶務係ならびに会計係は会計監事になることができない。
15. 支部長は本会を代表し、会務を統括する。
16. 評議員は支部長の選出のほか、本会の事業の企画、立案、運営等について評議する。
17. 幹事は支部長を補佐する。
18. 会計監事は本会の会計を監査する。
19. 評議員会及び幹事会は支部長が召集する。
20. 役員の任期は2年とし再任を妨げない。
21. 役員に欠員を生じた場合の後任役員の任期は、前任者の残任期間とする。

IV 集 会

22. 支部総会は原則として年に1回開催される。
23. 支部総会において支部長は会務の報告を行なう。
24. 時宜に応じて他の学会、研究会等と合同して集会を開催することがある。

V 会 計

25. 本会の経費は会費及び賛助会費、日本細菌学会からの補助金、その他の収入をもってこれに充てる。
26. 会費は年額千円とする。賛助会費は一口1万円とする。
27. 本会の会計年度は1月1日に始まり12月31日に終わる。

VI 講 師 謝 礼 金

28. 集会の講師に対する謝礼金および旅費を支出することができる。
29. 集会の講師謝礼金は北海道在住の講師については1万円、その他の講師については2万円とする。
30. 講師謝礼金の変更は評議員会の議決により決定でき、総会でこれを報告しなければならない。

VII 事 務 所

31. 本会の事務所は支部長所在の機関にこれをおくものとする。

VIII 付 則

32. この会則は平成3年2月27日より施行する。
33. 会則の変更は評議員会の議決により支部総会の承認を必要とする。

[編 集 後 記]

「北海道支部会報」第二号をお届けします。今回、ご多忙にも関わらず、寄稿していただいた諸先生に厚く御礼申し上げます。

5月に入り、札幌市内でも桜、梅、モクレン、レンギョウなどが堰を切ったように一斉に花を開き、北海道にも春がやってきました。鑑賞用の草木はもちろん、道端の雑草も、春、夏、秋と、時期に沿ってそれぞれに花を見せてくれます。毎年見ているはずですが、何故か毎年新たな感動を呼び起こしてくれます。

北海道は冬になると花はもちろん、緑も消えてしまいますが、研究のほうは、春夏秋冬問わず、北海道中、研究の花が咲き、全国のみならず、世界の研究者たちに感動を以て鑑賞していただけると良いですね。

(中根記)